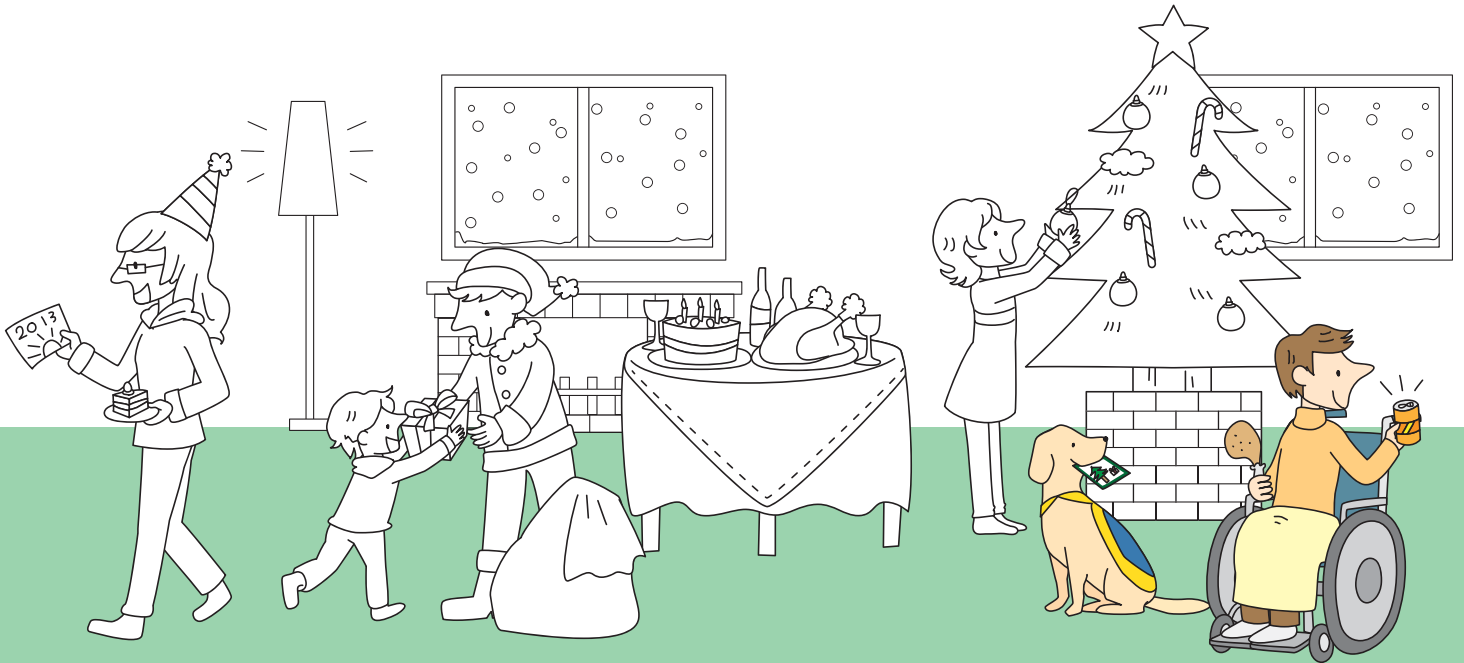


きすな

2012年
(平成24年)

12



12月3日

国際障害者デー

1982(昭和57)年12月3日、国連総会で「障害者に関する世界行動計画」が採択されたことを記念し、1992(平成4)年に制定されました。国連は加盟国に対して障害のある人の社会参加の一層の促進を呼び掛けており、日本では同日から12月9日までを「障害者週間」としています。

特集テーマ 障害のある人 みんな いきいき

- ② 第24回全国車いすマラソン大会
(篠山市)
- ③ みんなが
地域で安心・安全・豊かに暮らせる社会
植戸貴子さん(神戸女子大学健康福祉学部教授)
- ④ 高校と特別支援学校の生徒が
共に学び交流を深める
県立阪神昆陽高等学校・県立阪神昆陽特別支援学校

- ⑤ 障害のある人たちが働く評判のうどん店
淡路市社会福祉協議会 就労移行支援事業所
「さめきうどん幸来(はびくる)」
この人に聞く!
- ⑥ 身体障害者補助犬のさらなる普及に向けて
木村佳友さん(日本介助犬使用者の会会長)
- ⑦ ふれあいサロン
- ⑧ 情報ぷらざ





身体障害者補助犬のさらなる普及に向けて

木村佳友さん (日本介助犬使用者の会会長)

障害のある人にとって心強いパートナー



盲導犬や聴導犬、介助犬など、障害のある人の不自由な生活を補助する犬を身体障害者補助犬といえます。

2002(平成14)年10月に施行された「身体障害者補助犬法」によって、公共施設や交通機関はもとより、民間の商業施設などでも補助犬の同伴が認められ、補助犬の利用者はより積極的に社会参加できるようになりました。

宝塚市に住む木村佳友さんは交通事故で頸髄を損傷し、下半身まひと手先の自由が利かないなどの障害を負ったことで、16年前から介助犬の力を借りています。2001(平成13)年には日本介助犬使用者の会を立ち上げ、介助犬の利用者同士の交流を図るとともに、介助犬の啓発に取り組んでいます。補助犬は、使用者の体の一部になって日常生活をサポートするという大切な役割を担っています。それだけに補助犬の行動や健康、衛生などに細心の注意を払わなければなりません。木村さんのもとには介助犬の利用に関する相談が寄せられますが、管理方法や経済的な負担などに不安を感じて利用を諦める人も多いそうです。

「現在、国内には約1150頭の補

助犬が活躍しています。障害のある人が自由に補助犬と社会参加ができるように、関係機関やボランティアが連携し、補助犬の普及促進に向けて育成や研究を進めてほしいと願っています」



木村さんにとって2代目の介助犬「エルモ」。指示に従い新聞を取って渡します

補助犬への理解を広めるために奔走



身体障害者補助犬法の施行から10年がたちましたが、「以前は補助犬を同伴できた店で突然、入店を拒否される



ことがあり、普及啓発の難しさを痛感します」と言います。最近、ある大学教授による調査で「身体障害者補助犬法について知らない人が増えている」という結果が報告されたように、それは障害のある人に補助犬がどれほど必要存在なのか、社会に十分に浸透していない表れなのかもしれません。木村さんは障害のある人と補助犬を取り巻く現状を伝えようと、介助犬エルモと共に講演やイベントに出向いています。多くの人に補助犬に直接触れてもらい、補助犬に対する理解を呼び掛けています。

- 政府インターネットテレビで身体障害者補助犬を紹介しています
<http://nettv.gov-online.go.jp/prg/prg6301.html>
- 木村さんのホームページではエルモとの毎日をつづったブログや日本介助犬使用者の会の活動などを見られます
<http://homepage3.nifty.com/cynthia/>

「まず、ファイブフリー」
おすすめの一冊



自分をえらんで
生まれてきたよ
いんやりお著サンマーク出版

「心臓と肺に疾患を持って生まれてきたりお(理生)君は、これまで入院を30回以上繰り返ししています。本書は彼が9歳になるまでに、お母さんや周囲に語った不思議な話をまとめたものです。

「ほくは、自分が大好きだ。自分の体が、大好きだ。自分の体、ありがとう。」の一文からは、病気を受け入れて懸命に生きようとするりお君の勇気が伝わってきます。

締めくくりに掲載されたお母さんの詩「ありがとがいっぱい」は大切な息子への感謝の言葉であり、また、全ての命に対するエールのようにも感じられます。